

「日本における国際人口移動転換と其中長期的展望
—日本特殊論を超えて

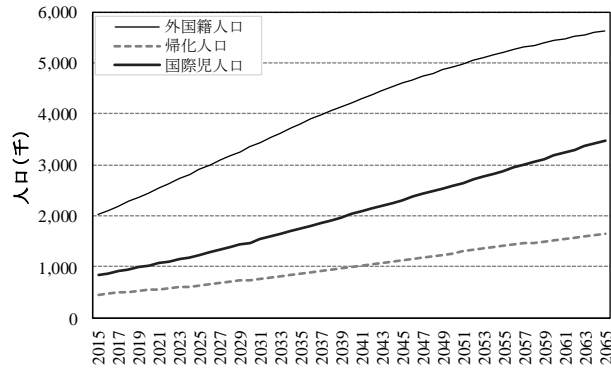
国立社会保障・人口問題研究所
是川 夕

国際移動転換とは、それまで移民送り出し側であった国、地域が移民受け入れ側に転換する現象をさし、日本では1990年代にこれを経験したとされてきた。その結果、日本は1990年代以降、外国人人口の急増を経験し、それによって引き起こされた各種社会変動は多くの研究の対象となってきた。しかしながら、こうした変化が中長期的に持つ社会人口学的な影響については行われておらず、その結果、日本の移民研究はマクロな社会的文脈における位置づけを見失いがちであったといえよう。

本研究では従来のように外国籍人口にとどまらず、帰化人口や国際児人口も含めたノンネイティブ人口に焦点を当て、日本のエスニシティ別現在人口の推定と其中長期的な変化を将来人口推計の手法を用いて明らかにすることを目指した。これは日本については初めての試みであり、その意義は極めて大きいものと思われる。

その結果、日本におけるノンネイティブ人口はこれに帰化人口、及び国際児人口も含めた場合、2015年時点で3,325,405人、総人口に占める割合で2.6%と国勢調査で把握された1,775,446人（総人口割合1.4%）の倍程度になることが明らかになった。また、将来的な推移をみると、25年後の2040年には7,260,732人（同6.5%）、50年後の2065年には10,756,724人（同12.0%）となることが示された。これは現在の欧州諸国の移民人口規模と同程度であり、日本が現在程度のペースで外国人の流入を経験した場合でも移民受け入れ国として十分な程度のエスニシティ構成の変化を経験することが示されたことの意義は大きい。更に、こうした変化は若年層で先行して進むことが明らかにされたことから、学校や職場といった場でノンネイティブ人口の包摂が先行して先鋭化することが示唆された。

今後の課題はエスニシティ別の動向や、社会経済的属性の変化など、ノンネイティブ人口の内的な多様性について明らかにした上で、こうした結果の持つ意味をより正確に示すことである。



出所：筆者推計値

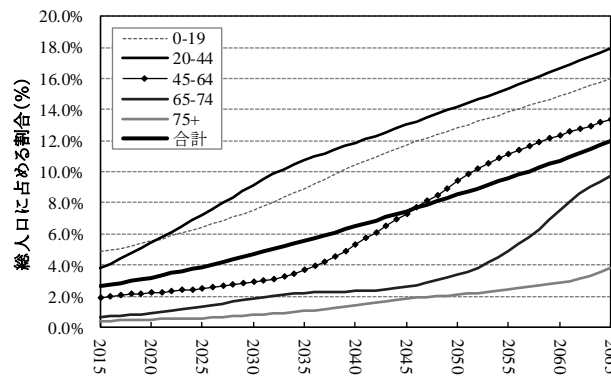
図 1 外国にルーツを持つ人口の推移（推計値）

表 1 外国にルーツを持つ人口に関する国際比較

	2015	2065
US	22.5%	56.4%
UK	16.6%	39.5%
Germany	17.8%	45.1%
France	15.8%	21.8%
Italy	12.7%	40.1%
Japan	2.6%	12.0%

注：欧州諸国の値はそれぞれ 2011 年、2061 年のもの。欧州諸国のノンネイティブ人口には外国籍人口、非正規滞在、及び第二世代以降を含んだもの。米国の値は非ヒスパニック系白人以外の人口で、それぞれ 2014 年 2060 年の人口。

出所：各種資料



出所：筆者推計値

図 2 外国にルーツを持つ人口の推移（総人口比）